

日比谷公園の成立ち

都市研究センター研究理事
山口 智

はじめに

日比谷公園は、明治 36 年（西暦 1903 年）に開園されて以来丸 100 年が経過し、平成 15 年（2003 年）には 100 年記念事業として各種の行事が行われた。日比谷公園は、皇居外苑の南に広がる面積約 16 ヘクタールの都市公園であり、さほど大きいとはいえない。しかし、この公園は、我が国初の近代西洋風公園であり、全国の都市公園モデルとしての役割を果たしてきた特別の公園であるといわれる。本稿では、このような意義をもつ日比谷公園の歴史を振り返ってみることとする。

公園制度の始まり

我が国における公園制度の始まりは、明治 6 年（西暦 1873 年）の太政官布告第 16 号によって府県に対し、公園という制度を発足させるので、ふさわしい土地を選定して伺い出るようにと通達したことによる。公用文に「公園」という語が使われたのはこの太政官布告が最初である。

「明治 6 年 1 月 15 日

太政官布達第 16 号

府県へ

公園設置ニ付地所選択ノ件

三府ヲ始人民輻輳ノ地ニシテ古来ノ勝区
名人ノ旧跡等是迄群集遊觀ノ場所（東京ニ於

テ八金龍山浅草寺東叡山寛永寺境内ノ類、
京都ニ於テ八八坂社清水ノ境内嵐山ノ類総
テ社寺境内除地或ハ公有地ノ類）従前高外
除地ニ属セル分ハ永ク万人偕楽ノ地トシ公
園ト可被相定ニ付府県ニ於テ右地所ヲ択ヒ
其景況巨細取調図面相添ヘ大蔵省ヘ可伺出
事」

この太政官布告を受けて、東京府は太政官政府に対して、浅草（金亀山浅草寺）、上野（東叡山寛永寺）、芝（三縁山増上寺）、深川（富岡八幡社）、飛鳥山の 5 箇所を上申し、東京に 5 公園が生まれた。

このように明治初期に公園制度が始まり、従前の社寺境内などの空間保全が行われたが、明治中期になって東京を首都として整備しようとする「東京市区改正」のなかで、その構想の一部として新しい公園をつくらうとする動きが起き、このような流れの中で生まれたのが日比谷公園である。

東京市区改正設計

日比谷公園は、明治 22 年（西暦 1889 年）に東京市区改正設計として告示された。

この東京市区改正は、我が国における都市計画の始まりというべきもので、帝都である東京を旧態依然とした江戸時代の姿から近代都市へつくり変えようとする

るものであった。

明治17年(西暦1884年)東京府知事芳川顕正が東京について、規模(計画人口と計画市域)用途地域制、道路計画、鉄道計画、運河計画、橋梁計画を内容とする「市区改正意見書」を政府に提出し、その内容を審査するため、「東京市区改正審査会」が内務省によって設置された。審査会は、明治18年2月から10月まで審議を行ったが、この審議のなかで初めて都市計画的観点からの公園計画が出された。公園についての審査会案は、大遊園(大公園)11箇所と小遊園(小公園)45箇所を配置するものであった。

審査会は内務卿に審査会案を上申したが、結局太政官政府の認めるところとはならなかった。しかし、審査会の成果は明治21年の東京市区改正条例の制定及び同条例に基づく東京市区改正委員会の設置につながっていった。

明治21年に我が国最初の都市計画法というべき東京市区改正条例が定められた。同条例は、東京市区改正の設計及び毎年度において施行すべき事業を議定するために内務大臣の監督下に東京市区改正委員会を置き、同委員会が市区改正の設計を議定したときは内閣の認可を得た上、東京府知事が事業を施行することを規定した。東京市区改正における都市計画の概念は、都心部の幹線街路をはじめ、水道、橋梁、河川、公園、下水等の都市インフラ整備事業であり、まず「設計図」を公定し、それを毎年度少しずつ実現してゆくやり方であった。

明治22年(1889年)5月に最初の東京市区改正設計が告示され、東京の都市

改造が始まった。東京市区改正設計は、その後大正7年(1918年)まで30年間にわたって実施されたが、主な成果は、都心部の道路拡幅、上水道の整備、そして日比谷公園の新設であった。なお、この明治22年の東京市区改正設計は、財源不足から明治36年に計画が縮小されたが、この縮小された計画は「新設計」と呼ばれ、当初の計画は「旧設計」と呼ばれる。

東京市区改正委員会は、「第一 日比谷公園」から「第四十九 王子公園」まで49箇所、計100万坪(約330ha)の公園を決定したが、これらは財源難のためほとんど実現しなかった。審査会の段階から計画されたもので、すでに太政官制公園として存在していた上野公園等を除いた新設公園で実現したのは日本橋の坂本町公園(面積約3,000㎡)だけであり、委員会で追加された公園で実現されたのは日比谷公園だけである。

なお、審査会では、公園を「大遊園」、「小遊園」の二つに区別していたが、委員会はこの区別をなくし、すべて「公園」と呼ぶこととした。

参考 市区改正新設計図

日比谷の地

現在日比谷公園のある一帯は、太田道灌の時代から江戸時代始めにかけての時期には海辺の漁村であった。当時は今と違い、この辺りまで海が入り込んでいた。太田道灌が江戸城主となってから約60年後の西暦1524年に江戸城は小田原の北条氏の所有となり、北条氏は江戸城の周りの村々を家臣に分け与え、「ひびや」村は家臣の一人大胡（おおご）氏（のち牛込氏と改姓）の領地となった。当時の文献では、「ひびや」は「比々谷」となっている。

この「ひびや」という地名は、漁民が海苔づくりや魚捕りのために使った「ひび」という道具に由来するといわれている。すなわち、海苔や牡蠣を付着させるために海中の干潟に立てる竹や、枝付きの竹などを海中に並べ立て、一度入った魚が出られないようにする仕組みのことを「ひび」といい、「ひびや」は、この「ひび」が立ち並んだ村という意味から出たとされる。「ひびや」は、「日々谷」、「日尾屋」、「日比谷」などと書かれたが、江戸時代には今と同じ「日比谷」が使われていた。

この地は、その後江戸時代には大体において大名屋敷となっていたが、明治維新の版籍奉還後、現在の公園区域及びその周辺は兵部省の所管となり、明治4年（1871年）に陸軍操練所となった。明治18年（1885年）陸軍操練所は日比谷練兵場と改称されたが、当時東京府下における唯一の練兵場であったこともあり、明治天皇は明治4年の天長節陸軍整列式

天覧のための行幸以来明治21年まで60回もお出ましになられた。

しかし、明治20年ごろになると、日比谷練兵場の周囲に建物が建ち始め、もはや練兵場として利用することがふさわしくなくなったため、日比谷練兵場に代わるものとして青山練兵場ができた。なお、青山練兵場はその後、明治神宮の創建に伴い神宮外苑となった。

日比谷公園の計画決定

日比谷練兵場跡地を東京市区改正設計によって公園とすることが提案されたのは、明治21年（1888年）11月に開催された東京市区改正委員会においてであった。同委員会において、道路原案の審議の際に、日比谷練兵場跡地を公園にしてはどうかという提案が内務二等技師工学博士古市公威及び東京府区部会議員芳野世経の両委員から出され、審議の結果、日比谷公園の一項を原案に追加することとし、道路原案とともに議定された。

東京市区改正委員会は、この日比谷公園の件を含め市区改正設計について明治22年（1889年）3月に復申案を議定し、内務大臣に復申。内務大臣の承認後、同年5月東京府知事によって東京市区改正設計として告示された（府告示37号）。

日比谷公園は、この東京市区改正設計の「公園」の部の最初に、「第一 日比谷公園 麹町区日比谷練兵場ノ内 面積凡五万四千四百坪」と記載された。日比谷公園の計画が正式なものとなったのである。また、「日比谷公園」を公園の部の冒頭に記載したのは、同公園を東京の中央公園

として最も重視したからである。

ただし、このように日比谷練兵場跡地を公園とすることとしたのは、同地が軟弱地盤で建築不適の地であると当時みなされたことがその背景にあるといわれている。

設 計

日比谷公園の設計の中心となったのは、本多静六林学博士である。本多博士は、日本の林学と造園学の始祖といわれる人であるが、最初に手がけた公園が日比谷公園であった。日比谷公園の新設当時、西洋風の公園を設計する専門家は一人もおらず、日比谷公園の設計の中心となった本多博士は、我が国における近代的洋風公園の生みの親といえる。

なお、本多博士が後年直接設計を手がけた公園には、奈良公園、養老公園、門司公園、尾道公園、岡崎公園等がある。また、博士は、明治神宮の森の造営にも多大の貢献をされた。

(様々な設計案)

ところで、本多静六博士が設計を手がける前に、様々な設計案が作成されたが、いずれも日の目を見なかった。

まず、明治 26 年 (1893 年) に東京市が設計案を作成したが、結局内部検討に終わった。しかし、それは、それまでの東京市内の公園が概ね神社仏閣の境内地を公園に編入したもので、面積は広くても遊歩地が少ないとして、日比谷の地にそれらとは異なる新しい公園を作ろうとする意欲を示したものだだった。

その後、日本園芸会が日比谷公園の設計を同会に委ねるよう東京府知事に働きかけ、明治 27 年 6 月に、甲乙丙の 3 案を提出した。うち甲乙両案は同会学芸委員で宮内省庭園係りを勤めていた小平義近氏が作成し、甲案は、工費 13 万 1,600 円で、約 3 万坪の山水模様庭園と約 8 千坪相当の砂利敷きの園内道路を築造し、外回りに約 935 間の煉瓦壁を設けるものであった。乙案は、工費 5 万 8,900 円で、約 1 万坪の山水庭、約 8 千坪相当の砂利敷き園内道路、約 9,135 間の外回り土手の築造と約 13,000 坪の区域に植物園、動物園、運動所を設置するものであった。丙案は、同会副会長田中芳男氏の作成で、その骨子は、日比谷公園は東京の中央公園であるから遊歩園が適当であるとし、全園を山水庭とすることを排し、遊歩地 3 分山水 1 分とするものであった。また、園内には大道小道の 2 種を設け、園の周囲には柵又は垣根を設け、また、運動場、馬場を設けることとしていた。

これら 3 案のうち東京市は丙案に関心を示したが、採用するところとはならなかった。

次いで、明治 32 年 1 月に、金沢の兼六園、水戸の偕楽園、岡山の後楽園、高松の栗林園などを参考に作成された設計案が市参事会に提出されたが、審議の結果、「本市公園は従来社寺・仏閣を主とするもので、日比谷公園は市自ら経営する最初の公園である以上なるべく慎重を要するから、設計考按を辰野博士に依頼し、その報告をまって設計に着手すべし」とい

うことになった。

そのため、市は、我が国建築学界の草分け的存在で、当時帝国大学工科大学長であった辰野金吾工学博士に設計を依頼した。辰野博士は、滞欧中の見聞を基に広場公園式の設計案を作成して、同年8月に市に提出したが、この案も採用にならず、その後市吏員による設計案も出たがこれまた不採用であった。

(本多博士の登場)

このようになかなか設計案が決まらなかったのは、新しい中央公園に対する大きな期待があった一方、公園設計や実施に関する経験が不足していたためであったとされる。このような状態のなか、市会からの圧力も強まり、また、一般市民からの批判もあったために、市は、明治33年(西暦1900年)日比谷公園造園委員会を設置し、本格的に設計に着手することとし、林学博士本多静六、軍医総監石黒忠憲、日本園芸会副会長福羽逸人、造園家小沢圭次郎の諸氏に設計を依頼し、本多博士がその中心となった。

本多博士にとっても公園の設計は初めてで、明治23年から25年にかけてのドイツ留学時に西洋の公園を見た経験と公園に関する蔵書数冊が手がかかりであったという。園の設計は、ドイツの公園を範とし、一部には日本庭園の手法も加えられ、洋風7分、和風3分の総合的近代公園の様式がとられた。行政による公園設置は、19世紀に英仏米よりも早くドイツで始まったとされており、博士が先進のドイツの公園を範としたことは妥当であったのではなからうか。

(設計の骨子)

公園には入り口として、東隅に有楽門、東側中央部に日比谷門(正門)、南隅に幸門、東北側に桜門、西隅に西幸門、北側に霞門の6門を設け、園内を大別して東南、西南、東北、西北の四部に区画した。また、6門を連絡し園内を曲線で結ぶ広路を設けた。

東南部は運動場とし、西プロシャ(ドイツ)コーニッツ市営公園運動場の意匠に倣い、中央を芝生にし、周囲を幅員6間(約11m)の競争路とした。また、この地域の小高い所を音楽台建設の予定地とした。現在小音楽堂のあるところである。

西南部は樹林地帯とし、中央に小さい丘を設け、周囲をツツジ園とした。また、樹林地帯は、北ドイツのベンゼン市立病院遊園の苑路・植栽形式を範とした。また、雲形池を設けたが、これもドイツ・ドレスデン園芸学校ベルトラム教授作成の図案によったという。

西北部は日本庭園予定地とし、とりあえず残土を盛って小さい丘を築き、平地は芝生地とした。

東北部の有楽門近くには旧江戸城の石垣土塁をそのまま残し、その内側には心字池をつくり、日本風の趣を漂わせることとした。池には噴水を設けた。池の北側には将来の公会堂敷地を確保したがとりあえずはリボン式花壇とした。その後公会堂が園の西南端に決まったため、この花壇は現在に至っている。

本多博士が市会に設計案を提出すると、いろいろな非難がなされた。設計案では、

従来の庭園とは違い各門に扉がないため、「夜間に花や木を盗まれてしまう」との非難があったが、これに対し博士は、「公園の花弁を盗まれぬ位に、国民の公德がすすまねば日本は亡国だ。公園は一面、その公德心を養う教育機関の一つになるのだ。家のなかでは親の隠しておく菓子までとって食ってしまういたずらの子が、一度菓子屋の小僧になると、数日にして菓자에飽きて一向に食わないのと同じで、私は公園にたくさん花卉を植えて、国民が花に飽きて盗む気が起こらないくらいにするのだ」と答弁したとのことである。

また、「池を造ると身投げの名所になると困る」ともいわれ、この点は博士も心配し、石垣の上からドブと飛び込まないように、池の周囲を低い地面にし、また、池の周囲に浅瀬を設けるようにしたことである。

着工及び開園

このように様々な意見が出されたが、博士の案は市会を通過し、明治35年4月、いよいよ着工されることとなった。予算は、博士の案では28万円であったが、17万5千円に減額された。ただし、すでに行われていた地均し、周囲柵等の工事費等を加えると、日比谷公園の開設には30万円近くを要している。

造園工事の監督は本多博士が自ら行い、助手の本郷高德氏が詳細図面を製作した。かくして、着工後1年余で一応の工事が竣工し、日比谷公園は、明治36年(1903年)6月1日仮開園した。明治22年の東京市区改正設計の告示以来14年ぶりのこ

とであった。

園内の施設の概要は、次のとおりであった。

道路

車道 6間幅 延長720間
5間幅(仮) 延長205間
音楽堂周囲 延長60間
歩道 幅3尺乃至11尺 延長3,305間 (1間=1.8m)

水道

75ミリ鉄管 延長420間
4分の3鉄管 延長770間

噴水 2ヶ

暗渠(7寸乃至2尺) 延長2,601間

庭園

洋風庭園植付き 1万8千坪
同植物及び苗木 1万8千坪
日本風庭園植付き 1,670坪
同周囲植付き 1,670坪
池沼 2千坪

遊戯場 4,870坪

競走場 2,950坪

点灯

白熱ガス灯 半夜灯、終夜灯各35基
電気灯(1,200燭光アークライト)
半夜灯、終夜灯各5基

その他 あずまや2ヶ所、水飲み10ヶ所、ベンチ150基等

また、樹木は、マツ、カシ、サクラ、ヒノキを主に、300種24,350本、花卉類は、125種12,000株であった。

当時の市民はこの新しい公園を大歓迎した。当時の新聞報道によると、開園当

初は、定刻前から各門外に集まった群集が一斉に乱入してほとんど歩けないほどで毎日盛況だったという。

開設当時の公園平面図

出典 前島康彦著「日比谷公園」P40

その後の歩み

以後日比谷公園は、明治、大正、昭和、平成と我が国の歴史とともに歩んできているが、その概略は以下のとおりである。

(1) 明治38年に音楽堂が完成するが、大正12年に大音楽堂ができてからは小音楽堂と呼ばれている。明治39年に市立図書館が新設された。明治42年にはドイツ・バンガロー風の日比谷公園事務所が新設され、これは現在都指定有形文化財となっている。また、昭和4年には、市政会館と日比谷公会堂が完成した。

また、松本楼は明治36年に開業したが、大正時代の東京市民にとって、松本楼でカレーを食べてコーヒーを飲むのがハイカラとされたという。

(2) 大正12年の関東大震災時には、市民の避難場所として重要な役割を担い、

被災市民用のバラック144棟が運動場に建てられた。小音楽堂も倒壊し、松本楼も焼失した。なお、両建物は、後日再建された。

(3) そのほか日比谷公園を舞台とする歴史的な大事件としては、明治38年(1905年)の日露講和条約を不満とする日比谷焼討ち事件がある。これは、日比谷公園で催された大会の解散後、憤激した群集が交番、新聞社などを焼討ちしたものである。

戦時中は、軍の陣地として使用され、また、食糧難を救うため公園も畑となり、花壇にはジャガイモが植えられた。また、戦後は昭和20年から26年まで進駐軍に接収された。

(4) 昭和26年から復旧が始まり、昭和36年の大噴水の完成によって戦災復興は終了した。昭和46年には、沖縄返還協定批准に反対する過激派学生グループが火炎瓶を投げ、松本楼が全焼した(昭和48年再建)。また、昭和58年には、大・小音楽堂が建て替えられた。

おわりに

日比谷公園の開設は、都市の真中にも人工的に造られた水や緑に囲まれた憩いの場が必要であるということをも人々に認識させ、日本の公園の発展に大きな役割を果たした。

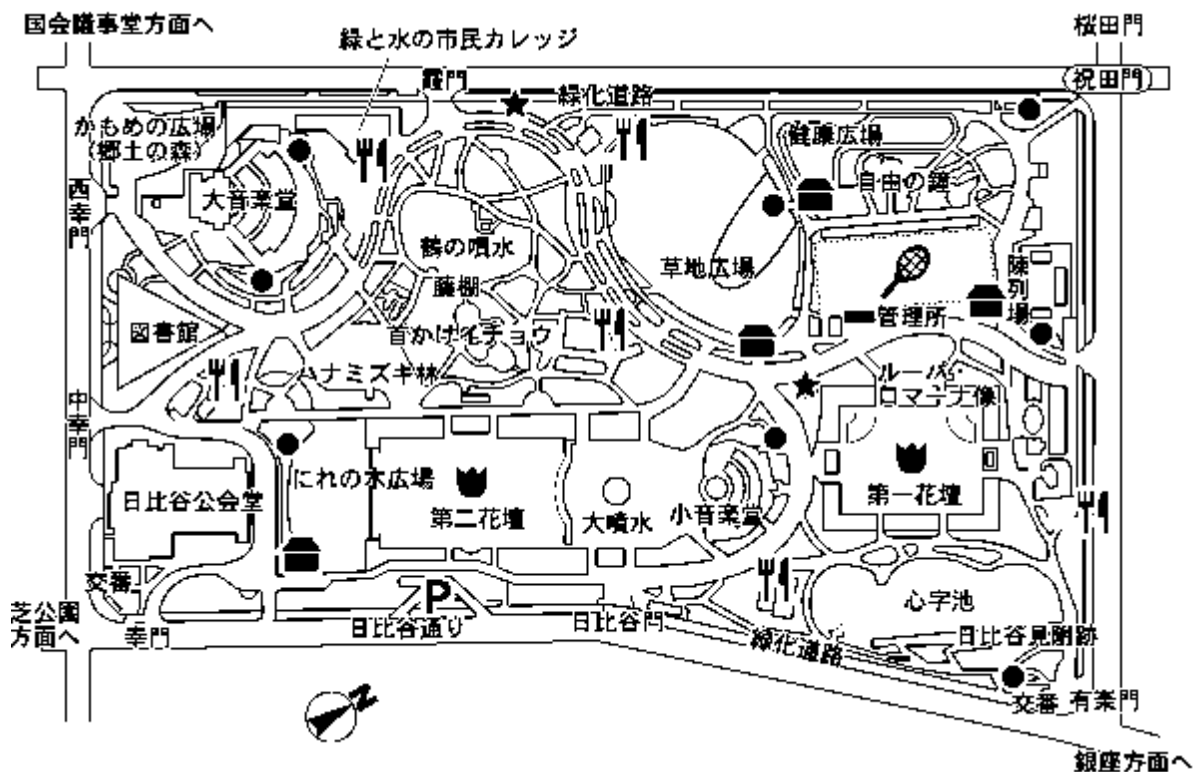
日比谷公園は近代的公園の第1号であり、東京のみならず日本の近代文化遺産といえるが、日比谷公園開設の意義につ

いて、前島康彦著「日比谷公園」は次のように指摘している。

「東京市区改正設計における最も新しい構想として計画され、この事業における唯一最大の洋風中央公園として出現した日比谷公園は、その面積においては太政官布達による社寺境内地公園よりは遙かに劣るとしても、公園の質において、かつまた日本の都市公園史において、近

代における最初にして最大の収穫であったことはいうまでもなく、これによって都会人は公園の必要性を目の当たりに意識し、同時にこれが東京の新名所となって市内各所の公園の新・増設に新たな意欲を盛り上げたばかりでなく、日本の各都市における公園造成の機運を醸成する機縁をつくったのであった。本公園を国家的公園の濫觴という理由はここにある。」(P58)

現在の日比谷公園



出典 <http://www.tokyo-park.or.jp/kouen>

参考文献

前島康彦『日比谷公園』郷学舎、昭和55年

小野良平『公園の誕生』吉川弘文館、平成15年

末松四郎『東京の公園通誌 上』郷学舎、昭和56年

末松四郎『東京の公園通誌 下』郷学舎、昭和56年

小坂祐弘『松本楼の歩み』日比谷松本楼、昭和48年

田村明『江戸東京まちづくり物語』時事通信社、平成4年

藤森照信『明治の東京計画』岩波書店、平成2年

渡辺俊一『「都市計画」の誕生 国際比較からみた日本近代都市計画』柏書房、平成5年

越沢明『東京都市計画物語』日本経済評論社、平成3年